

# 講演録：研究者の情報発信を学問の観点から考える

宮野 公樹

## はじめに

本日は、みなさまにお話させていただく機会を与えていただき、ありがとうございます。宮野と申します。京都大学の学際融合教育研究推進センター（以下、学際センター）というところに所属しております。私は今、どちらかというとも哲学、形而上学と呼ばれる領域で、日々、学問や大学について、何か考えたりしていますが、元々は金属組織学の出身で、研究者人生の半分はいわゆる理工系です。様々な出会いや出来事があって今の領域にいるのですが、かつて理工系でどっぷりと論文の制度に浸ったせいなのかわかりませんが、今、私の研究、探究テーマは、その論文や研究の「評価」というものや、「学術の制度そのもの」を問うものになっています（笑）。制度的な観点というより、哲学的な観点からです<sup>1)2)</sup>。ですので、本日、この場が、現状の学術、研究制度上において、どのように効果的な情報発信が有効・有益か、といった主題であれば、私の話しは本当はそぐわないのかもしれませんが、少しでもお付き合いいただければと思います。

ここでまず、私の所属する学際センターを紹介します。学際センターは、京都大学における複数の学術領域を横断する学際的な研究教育活動を機動的かつ柔軟に実施する体制の整備、ならびに、学際的な研究教育活動の促進や支援をミッションとし、2010年に設立されました。この学際センターの主たる事業は、「ユニット制度」<sup>3)</sup>と呼ばれるもので、様々な学術分野の教員・研究者が集まった学際的な研究教育グループを「ユニット」と称し、そ

のユニットの設置承認と制度的支援をしています（本原稿執筆時2024年時点では合計22ユニット）。加えて、そのユニットを生む土壌づくりもまた重要な事業です。今回は、その代表的な2つの企画について紹介いたします。また、これより以下は、組織を代表しての発言ではありませんが、かといって完全に私個人の意見でもありません。一企画実施担当者としての考えであるご理解ください。

## 学際的な企画の紹介

まずは、どの学術分野でも発表できる研究ポスター発表大会「京大100人論文」<sup>4)</sup>です（図1）。通常、



図1 京大100人論文の様子(2019年)。



図2 全分野交流会の様子(京都大学学際融合教育研究推進センター, 2023年).

どの分野でも発表できるとなると、専門用語や研究背景が理解しにくく、どちらかという総花的なふわっとした研究交流になりがちですが、この企画ではそれを解決すべく、なんと、研究ポスターを「匿名」で掲示することにしています。そして、その研究ポスターに対し、これまた匿名で付箋紙にてコメントを書き込む、という大胆な戦略をとっています。これにより、つい所属組織や学術分野名で内容を判断しがちな我々のバイアスを取り除き、分野や組織を分け隔てなく研究のテーマそのものに着目して本音で意見交換することが可能となります。もちろん、工夫はそれだけでなく、実は、研究ポスターは、研究者が「背景、方法、考察」など項目立てして書いたり、自由にデザインしたりすることなく、「私の関心ごと」、「これまでしてきたこと、やろうとしていること」、「みなに聞きたいこと、コラボしたいこと」といった3つの質問に各300文字で記載したものを掲示するだけです。こうでしないと、研究ポスターをパッと見た瞬間に、どんな分野か分かってしまい、「あ、これは私の関心と違うな」とすぐに心にシャッターを閉

めるのですよね(笑い)。

この分野不問で匿名制の研究ポスター発表形式は、ありがたいことに広島大、愛媛大、新潟大、東大、関大などなど、全国20以上の様々な大学でも実施され、研究者同士の本音での対話の土壌づくりとして定番になりつつあるのはとても喜ばしいことです。

次に、紹介するのは、2013年から毎月欠かさず実施している「全分野交流会」です(図2)。毎月最終金曜日の夜、京都大学キャンパス内で実施しております(コロナ禍ではZOOMで実施。2024年現在は、3ヶ月に1回はリアル開催でそれ以外はZOOM)。毎回40名ほどが集まり、思い思いにグループディスカッションを楽しみます。参加者は研究者だ

けでなく、他大学、企業、学生、一般の方など、下は高校生、上は名誉教授まで本当に幅広い方々が集まります。今日、「学際」はどの大学でも重視され、様々な活動が行われていますが、結局のところ、まず出会いがないとなにもはじまらないのですよね。課題解決を目的に掲げて、関連する分野の研究者がチームを組むにしても、知り合いがないことにはチームすら組めませんし。結局のところ、「外」を知らないと、「外」にいかない。だからこそ、この全分野交流会は、そういうまず外を知る場、出会う場としてゆるく実施しています。具体的には、例えばこの交流会から共同研究を生み出そう!とか、競争的資金を取りに行く仲間を見つけよう!とか、目的的になりすぎないことに気を配っています。ある程度、純粋に交流を求める人に集まって欲しい。たぶんそれが「学び」につながるのですよね。学びたいという人が集まってくるからこそ、本当に安心して話せる交流場になっています。最初のころは10人たらずからスタートして、13年たった今では毎回40名ほどが集まるようになりましたが、ほぼロコミで広がっ

ております。ZOOM開催の月は、みなさまもぜひともご参加くださいませ。

## 情報発信や研究者間のコミュニケーションの本来の目的

学際センターでは、他にも様々なことをやっています。すべてにおいて通底させている大事なことというのは、研究者マインドの磨き合い、研鑽です。共同研究の創発をねらったコラボレーションや、研究テーマの発展などももちろん大事ですが、それ以前に、研究「者」としての構えというか、研究魂というか、それがしっかりと根底にないと、学術の知への貢献ではなく、業績のための論文生産になってしまうと思うのです。今、あえて「論文生産」と揶揄した言葉を使いましたが、今日、研究者は研究時間がなかなか取れない、とにかく忙しいということになっているのも、論文が「創造」するものではなくて「生産」するものになっていることが、その理由の一つと思うのですよね。

この観点において考えると、本日のこの会のテーマである「研究者の情報発信」が、今、課題としてあげられることもまた、納得できます。学問という営みが、今、どうも、なんとというか、すごく社会的というか、功利的というか、なんかそういう風になっている。だから、研究を広めたい、どこか活用して欲しい、コラボ相手を見つけないといったような願望が存在する。そして、情報発信をうまくやりたい、やらなければならない、研究者にそういう能力が必要だし、そのためにトレーニングが必要だ、となるわけです。ただここでやはり考えたいのは、そもそも何のための情報発信か？ということ。情報発信の目的は、研究を広め、活用して欲しい、コラボ相手を見つけないからなわけですが、私は、そのような目的の手前、または根底に、もっと大学人として大事なマインドがあるのではないかと、それが先に申しました、研究者の研鑽マインドだと思うのです。

学際センターで実施する企画で大事にしているのはこの研鑽マインドであるとお伝えしました。

結局、異分野が集まる「学際」とか、「研究者間のコミュニケーション」、そして「情報発信」等は、コラボや研究の展開を目指す手前に、まずもって交流を通じて自分自身を知る、もっというと、自分の小ささ、狭さを自覚することが本来の目的であれ、と思うのです。誤解を恐れずに言いますが、コラボレーションや情報発信を考える前に、我々は、ほんとうにいい研究、いい仕事をしているのでしょうか？ こういう問いをあわせ持たないと、例えば、まずラーメンを作っておいて、店が繁盛しないのは広報・宣伝が悪いからとか、この味をうまいと思わないのは時代のほうが悪いとか、そういうふうな外に原因や責任を求めがちになるのですよね。

この考えは、よくある「学際」の失敗談にも当てはまります。文科省等学術行政のHPや競争的資金の説明文章に頻繁にみかける文言として「一層複雑化する社会的課題の解決には複数分野の共同が必須である」という類のものがありますよね。課題解決のためにコラボレーションしてくれたら研究資金をあげますよ、と言うものです。ただ、複数の学術分野を同じテーブルにつかせはするものの、どうしても付け焼き刃的な共同に留まりがちで、お金の切れ目が縁の切れ目になったりします。「この原因は、異分野間で共通の言語がないからだ」とった言説もよくみえますが、そういう言葉の定義とか、相手の理解とか、かなりテクニカルな問題の前に、そもそも、自分は自分以外の分野のことは何も知らない素人である、と、自分は未完であり、途上なのだ、という構えが必要なのです。強烈な使命感か、莫大なインセンティブがない場合は、そういう謙虚に学ぶ姿勢を有した研究者が集まって、やっと本質的な共同作業ができる。

私は、学問とは？ 専門とは？ 大学とは？ を探求し、学問や大学の歴史、時代や国を超えて「学問」や「専門」について語る学者たちの言に触れることで、上記のような考えに至ったわけですが<sup>5)</sup>、特に、ここで哲学者三木清<sup>6)</sup>の言葉を紹介します。これは1937年に書かれたエッセーからの引用です。

「専門家たるもの、突き詰めればおのずと基礎

たる哲学に接触するのは当然とし、自分の専門の意味をその外に立つことによってよりよく反省せんがため、あるいは自分の保持する原理の包括力および影響力を種々の分野において試さんがため、他分野と接触することを余儀なくされるもの。」

私はこの言葉を読んで、こん棒で頭を殴れたような気になりました。せつかくなので、しっかり説明します。まず、「専門家たるもの、突き詰めればおのずと基礎たる哲学に接触するのは当然とし」から。まるで「こんなみんな当たり前だから言うまでもないけど」って感じでさらっと書いてありますが、今日、過度に細分化された学術分野に身を置く我々からすると、この一文の深さに頭がさがります。専門はなんでもいいのです、物理だろうが、法律だろうが、歴史だろうが。でも、専門家であるなら、つまり、〇〇マニアとか、〇〇オタクではなく、学問たる専門であるなら、必ず哲学と呼ばれる考え、思想に行き着くよね、ってことです。単なる専門家の集まりが大学ではありません、断じて。個別があって全体があり、全体があって個別がある。つまり、各専門はあれど総合的に学問(精神)という一つの寄るべきものがあることで、大学足るのです。専門分野は単なるラベルでしかない・・・それを痛感させてくれる一文です。

そして、こう続きます。「自分の専門の意味をその外に立つことによってよりよく反省せんがため、あるいは自分の保持する原理の包括力および影響力を種々の分野において試さんがため、他分野と接触する」と。先ほど、上でも申しましたが、情報発信やコラボレーションのために他分野とコミュニケーションするといったことではなく、自分を「反省」するためにこそなのです。そして、「ああ、私はこのように考えていたが、そのような観点もありうるのか」という問いとともに他分野と関わるなかで、学術という体系における自分(の専門)の立ち位置が自覚される。これは、例えば、金属学における鉄鋼と非鉄の専門家が語るといった比較的近い領域での対話に決してとどまらないことに注意してください。「自分はなぜ金属の研究を

しているのか。どこに惹かれたのか。何を目指しているのか」という内省的問いは、「金属とは何か」という問いへと昇華し、自然科学的な観点だけでなく、金属ひいては物質自体の存在を歴史的、文学的に感じることも十分に可能です。いや、そうでなければ、研究ではあっても学問ではないのです<sup>7)</sup>。そして、最後の文ですが、「他分野と接触することを余儀なくされるもの」とあります。結局、こういった他分野との接触は、課題解決のためになされるものでもなければ、情報発信のためでも、コラボレーションのためでない、学者として当然な自然の営みであると三木は言っています。こういうかつての学者の精神に触れると、我々現代の研究者が如何に研究はしていても学問はしてないのを感じることもとなります。

このあたりで感づいた方もおられるかと思うので話しますが、私は、研究と学問を明確に区別しています。詳しくは、この論文<sup>8)</sup>を読んでいただきたいのですが、端的に言うと、今日、「研究」とは、課題解決を目的とするもので、「学問」とはすべての根源に迫ろうとするもの、と区別しています。特に、一度、研究＝課題解決的なもの、という置き換えで、大学や学術行政の文章を読んでみてください。まったく不都合なく読めることに気づきますよ。私としては、「ああ、いつのまにか、そしてこともあるか、我々大学は学問のほうを忘れてしまっているのではないか・・・」、日々そのように感じています。これは課題解決や「役立つこと」を否定しているのでは断じてありません。研究は「役立つこと」をやりますが、学問は「その“役立つ”とは何か？」と考えることで役立ちますよね(笑い)。両方がないと、豊かな世の中にはなりません。では、工学は学問か？と思われるかもしれませんが、はい、学問です。それについてもかつて論考にて書いたので、ご関心あればお読みください<sup>9)</sup>。

## 改めて「情報発信」について

この講演の最後に、改めて「情報発信」について

考えます。以下、少々大胆というか、極論のようなことをいいますが、それもまた学問である証拠だと思ふのですよね。果ての果てまで考える。根源において現実を見ることこそが学問なのですから、実際に、学問を持ってして「情報発信」を考えてみたいのです。

改めて言うまでもなく、大学における個々人の探究が学問としての探求であるなら、その営みは真理、または普遍を目指すこととなります。ここで、真理や普遍なんて確固として存在するのか？と思われるかもしれませんが、それが在ること、それを保持することが大事なのではなく、追求し続けることこそが本意なのは言うまでもありません。我々は生涯、学徒です。ところで、真理、普遍というのは、あらゆる事象においての本質を意味しますよね。その証拠に、我々は「これは〇〇分野、〇〇学における法則だ」とは言いますが、「これは〇〇分野、〇〇学における真理だ」とは言いませんよね。真理、普遍は、一つです。ゆえに、時代も国も何もかも超えてすべての人間に共通する何かです。であれば、それが真理ないしは普遍に迫ろうとする探究であるなら、この探求の営み(の価値)を理解して欲しい!といった類の情報発信は全く必要ない。だって、誰しにも必ず感じられるものなので。他方、こういう探求があることを知ってほしい!という情報発信はあるかもしれません。ただ、学問において、自分の探究を他者に知ってもらいたい理由というのはどのようなものでしょうか。あるとしたら、それは三木清のいう研鑽ですね。それ以外の理由はあるはずありません。思えばソクラテスもまたひたすら対話を求め、道歩く人にほうぼう話しを持ちかけていましたね。

学問の営みであっても、コラボレーションのために情報発信するのはアリなのでは?と思われるかもしれません。もちろん、それもアリです。ただ、本来の学問精神から言うなら、コラボレーションもまた、ともに研鑽する探求者同士としての対話が目的となります。ともに語りあってお互い深めあおうではないか、といったような。先に上げたソクラテスの場合でも、最も重視したのは、対話

の相手。自分は変わる用意がある、そういう態度を持った人、知を愛する人との対話こそが一番大事であると言っておりました。

なお、「研究」においては、対話の相手としてではなく、共同作業としてのコラボレーションは必須です。今日、単一の分野のみで解決できるほど、課題は単純じゃありませんね。であるからこそ、情報発信は必要なのでしょう。ただ、気をつけたいのは、情報発信はあくまで手段であること。つまり、「年間、何件、情報発信したか?」などといった指標を用いて研究者や研究組織を評価するのは悪手ですよね。何がしたくて情報発信をするのか、その「何か」が達成されたのかどうかで評価しないと、情報発信のための情報発信をすることになる。これでは忙しくなるばかりでいつまでたっても状況はよくなりません。

以上、学問として考えると情報発信はこのように考えることもできる、と言う話でした。冒頭話したように、元も子もない話で恐縮です。言うなら、情報発信の必要性やテクニカルなことも大事だが、その目的こそをよく考えよ、と言う話であり、みなさまが求めていたことと異なるかもしれませんが、私なりにこれこそが大事ということをお話しました。ありがとうございました。

## 質疑応答

(質問者 A) 研究における情報発信の目的の一つに資金獲得もあると思うが、研究をしていると常にお金の問題はついてまわる。研究とお金の関係についてお伺いしたい。

(宮野) もちろん、我々は何かをしようと思うとお金は必要ですよ。かといって、(たくさん)お金があればいい研究できるかとそうでないですよ。この点について、よくよく考えておかないとダメだと思っています。何が先にあるべきか?ってことです。

(質問者 B) 宮野さんは、情報発信を学術、学問のあり様から話したが、大学や組織など、それらの制度や構造を変えないとダメだという意見か。

(宮野) 確かに学術全体に憂いはありますが、それらを変えようとは思っていません。私は、学術界を変えよう！と叫ぶ人ほど変えられないと思っています。それは学術界や社会と自分が別という発想からきています。変えうる対象として学術界が自分の外にある。そうではなくて、本当は内にあるのですよね。自分が変わることが学術界が変わるということ。だから私は私の手の届く範囲で、私自身の学問精神に全くの嘘偽りなく「学問」をさせていただけます。

(質問者 C) 研究者が研究紹介するとき、どうしても、「・・・に役立つ」「・・・の解決につながる」と話すが、私は基礎研究をやっているので「・・・が知りたいから」としか書けなくて困っていたが、今日の話を聞いて、それでいいのだと思った。

(宮野) 研究紹介では、文字通り、研究の「紹介」をするとつい考えがちで、「こういうことをやっている」という内容を話しますが、その際、私が本当に大事だと思うのは、自分がなぜこの研究が好きと思っているのか、大事と思っているのか、ということ、いうなら自分の人生を話すことです。それが研究に血を通わせるというか、生ける学問になると思っています。

#### 参考文献

- 1) 宮野公樹：学問からの手紙，小学館，(2019)。
- 2) 宮野公樹：問いの立て方，ちくま新書，(2021)。
- 3) ユニット制度，<https://www.cpier.kyoto-u.ac.jp/project/unitsystem/> (京都大学学際融合教育研究推進センター内サイト)
- 4) 京大 100 人論文，<https://www.cpier.kyoto-u.ac.jp/project/kyoto-u-100-papers/> (京都大学学際融合教育研究推進センター内サイト)
- 5) 宮野公樹：専門とは何か，京都大学アカデミックデイ 2023. <http://hdl.handle.net/2433/285084>
- 6) 三木清，大澤聡 (編集)：三木清大学論集，講談社文芸文庫，(2017)，37。
- 7) 宮野公樹：勉強思考，研究志向，学問思考，京都大学アカデミックデイ 2019. <http://hdl.handle.net/2433/244438>
- 8) 宮野公樹：産学連携の形而上学—大学の在り方を添えて—，現代思想，2020 年 10 月号. <http://hdl.handle.net/2433/268021>
- 9) 宮野公樹：異分野融合の意味と意義，まてりあ，60 No.10 (2021)，615-619. <http://hdl.handle.net/2433/276587>

\*本文は、当日の講演内容を本誌用に大幅に修正して記載。

みやの・なおき MIYANO Naoki

立命館大学理工学部卒業。同大学博士後期課程修了。その後、McMaster 大学、立命館大学、九州大学を経て、2011 年より京都大学学際融合教育研究推進センター准教授。京大総長学事補佐、文部科学省学術調査官の業務経験も。国際高等研究所客員研究員。一般社団法人 STEAM Association 代表理事。2022 年から日経 STEAM アドバイザー。近著『問いの立て方』(ちくま新書)。『世界が広がる学問図鑑』2023 年 2 月 (Gakken) の監修も。